BAD END…

千崎 心刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＡＤ　ＥＮＤ…

【Ｎコード】
Ｎ７７０２Ｈ

【作者名】
千崎　心刃

【あらすじ】
本編主人公「北條正義」２７歳独身は遠山巌とある事件を追う。何気ない事件、何気ない日常、しかし事件を追って行くに連れある一連性を持った奇怪な事件へと発展していく。そう…まるで明かりのない山奥に何故こんな所に？と想像できない井戸の底のような闇の世界…

何気ない事件簿（前書き）

サスペンス物は得てして曝す事の出来ない事ばかり。あえて言うなら致る所に謎解きのヒントとフラグがたっております。途中経過で事件の纏めを作り読者様へ結果を想像してもらいたいと思っております。

何気ない事件簿

「カチカチッ…」

「ピーポー、ピーポー……」

……

「はい、被害者は天海裕子、歳は２４歳、外傷は首の後ろを…刃物と思われますが一突きです。争った形跡はありません、通報から駆け付けた時には既に呼吸はありませんでした。第一発見者はいません。連絡を受け近くに居た私が現場へ駆け付けました。」

…

「北條君は現場で鑑識が来るまで待機、詳しい話は調書を取るから。」

「了解です。」

「あぁそれと遠山さんがそちらに向かってるから、彼にも状況を詳しく説明しといてくれ。」

「了解しました。」

しかし酷いな、そこそこ見慣れて来たとはいえ、若い女性の遺体には目を覆ってしまいそうになる。

何時もは遠山さんと動いているので現場に一人で踏み込む事はないのだが、通報から1番近くで別件の捜査をしていた私が通報の状況が状況なだけに単独踏み込む事になった。
状況を分析し、後ろからもしくは前から手を回し首の後ろを一突きといった所か、得てしてこういった状況を推測すれば、身内関係筋が先ず疑われる。何故か？物取り、強盗類いの線でいけば、一突きでの急所は先ず無理である事、つまりホトケが“知っている顔”でなければ…近距離からの犯行は無理といっても良い。更に言うなら、相当に油断させる事の出来る状況をつくり出せ犯行に及ぶ事の出来る人物。

痴情の縺れ、怨恨、まぁ大概はそういった線で捜査も入って行くであろう。

……
「バタン…」

ドアを開ける音に気付き目を向ける…

「あっ、山さん。鑑識より早い、流石現場第一主義ですね。」

「…馬鹿言ってねぇで先ず現場の状況を教えろ！」
「はい　は～い。」

遠山　巌　西新宿署　捜査係2課の刑事　６１歳　後数年もすれば退職だか現場一筋の偏屈親父のせいか出世を自ら放棄しベテランとして活躍している。もちろん経験と裏付けされた知識と鋭い勘で解決した事件は数々。普段は温厚で言葉少なめな性格のせいか“ホト

ケの山さん”等と呼ばれている…
「某ドラマの影響は２０年以上経っても凄いものだ。」私は3年程前からこの山さんこと遠山さんに付き刑事としての“教え”をよろしくご指導して貰っている。

「ガイシャは２４歳　天海裕子　独身
通報時刻が7時１３分
私が駆け付けたのが7時１８分
予想犯行時刻は通報時刻の前後3分程
凶器は刃物と思われます。　後部から首の頚椎辺りを一突き。出血多量によるショック死とみられます。　現場が荒らされてない事、財布、宝石等金銭が取られてない事、刺し後等からガイシャの顔見知りの可能性が高いと思われます……後…
前から刺したと思われます。
「…何故そう思う？」

「血が噴き出し床に付着した後が綺麗に放射線状になっており、恐らく犯人は血痕が残らないように刺した。刃物の扱い方を知っており。周到に後の事を“考えて”犯行に及んでます。」

「ふん、『見て』『観て』『診る』事は大体出来てるな。」

「他には？」

「え～っ、他ですか？」

私は眉間に皺を寄せ顎に手をあててしばし考えてみた…

「う～ん？……あ！痴情、怨恨の縺れの可能性が高いっス！」

「馬鹿たれ！！」

「ひいっ！」

「んなこたぁ、見ればわかる！」

「予測犯行時間から何分経っている？」

「え～っと…３０分っス」

「じゃぁ、犯人はまだ近辺に潜んでいる可能性だってあるだろ？」

「事件は初動捜査が大事なんだってあれほど言ってるだろうが！」

「まだ痕跡が残っているかもしれん、此処は一人現場に残って、お前は直ぐ足で追え！」

「了解しました！」

私はくるりと足を返し外へ出た。

2話～初動捜査～

外に出るとちょうど鑑識官と救急隊員が現場へ到着していた。
素早く救急隊員へ被害者の息が無く即死である事を告げ、鑑識待ちになるであろう事と司法解剖に回るであろう事を説明した。
その後、鑑識官へ現場に遠山さんが入っており。遠山さんから直ぐに初動捜査に向かうよう指示があり、現場の状況確認は遠山さんにお願いする事を伝えた。

……

「さてと、先ずは通報して来た人からの聞き込みと犯人の足取りから始めますか。」

携帯電話を取り出し本部へと電話した。

「プルル…ッ、プルルル…ッ」

「はい、コチラ西新宿署捜査一課」

「あっ、神碕さん？北條です。直ぐ聞き込みに入りたいと思いますので、通報者の連絡先をお願いします。」

「北條君？何時もながら山さんの初動捜査早いわね…上は捜査命令も発令もまだなのに勝手に捜査を始めると、何時も良い顔してないわよ…」

「初動捜査第一、現場第一主義ですから…」

「山さんも何時もの口癖で『現場の証拠は現場にしか落ちていない、

そしてその証拠は時間と共に劣化して行くんだ！上はそれがわかっておらん！』って言ってますし…」

「ふ～っ…わかりました。ちょっと待ってね。」

「……良い？『×××－×××××－×××××』です。」

「ありがとうございます。」

「あ！真琴さん今度デートして下さいよ～」

「ハイハイ、自分の力で事件解決出来たらね。」

「了解です！では事件は“初動捜査”が第一ですから、聞き込みに入ります。」

神碕　真琴さん僕より二つ上の独身。ショートのボブで何時も眼鏡をかけているがダテである。本人いわく『らしく見えるでしょ』何て言っているが僕を含め皆からは歳を過ぎた眼鏡っ子。某漫画ミニスカ警察に出てきそうな童顔の同僚である。彼氏もいないとの噂なので何時もデートにお誘いするのだかまだ一回も叶えられてない。拘わった事件は大概にして山さんの捜査での事件解決で僕は何の役にも経ってないのが実情だ。

「あ！石橋ふみ子さんのお宅でしょうか？私、西新宿署の北條と申しますが、通報時の状況を確認したいので今から伺って宜しいでしょうか？」

「…はい…わかりました…」

私は同じワンルームマンションの同階にある現場の部屋の二つ横になる石橋さんの部屋を目指した。

「しかし…女性向けのワンルーム、室内灯の付き具合からして夕飯時に疎らにしかいない、多分場所柄のせいか、このマンションに住む女性は“夜のお仕事”の人が多い事を物語っているように感じる。オートロック式でぼちぼち近隣の野次馬が集まって来ているが、中の住人は全く表に出て来ない。
どうやら現場の両隣も不在らしい。中には山さんと鑑識官、救急隊員が入ってるのだろうが私は石橋さんの部屋をノックした。

「あ！先程お電話した北條ですが。」

「…はい……どうぞ…」

物々しい雰囲気に気付き事件が不幸な事になってしまった事を肌で感じている彼女はおどおどしながら震えていた。

「大丈夫ですよ。今は警察も集まってますし、安心して下さい。」
何時も辺り前の日常に突然
「キャー！」と言う悲鳴が聞こえて警察が来て物々しい雰囲気に変わったのだ、不安になるのも無理はない。
しかし状況を聞き取りしなければ先には進まないので詳しい話を聞き出してみる事にした。

「石橋さんわかる範囲で構いませんので数点お話をお聞きします。」

「…はい。」

「えー先ず異変に気付かれたのはいつ頃ですか？」
「はい…7時を回った頃だったと思います。突然『キャー』と言う悲鳴が聞こえて…『ドサッ』と人が倒れる音がしました…鮮明に聞こえて来ましたので直ぐ近くの部屋だろうと思い、１１０番を回しました。電話の時間表示から7時１３分だったと思います。」
成る程、通報時刻から犯行は逃走して間もない時間という事になるな。

「その後何かありませんでしたか？」

「…はい……部屋の外に出る勇気は出ませんでしたので聞き耳を立てて様子を伺いました。」
「外でバタンとドアが閉まる音がして走り去る音から非常口へ向かっているんだと思いました。」

「他に気付いた点はないですか？」

「わかるのはそれ位です。後は不安で不安でたまりませんでしたから…」

「わかりました、捜査のご協力ありがとうございます。」

「あのう～それでその方は……」

多分近隣と事で不安なのでろう、小さい声で聞いて来た。

「すみません、まだ捜査段階なので詳しい話はコチラから出来ないんですよ。」
私は新聞記事、ニュース等で明日になればわかる事だが、今この状

況で石橋さんに不安を与えてはいけないと判断し亡くなっていた事は伏せた。
「では、また思い出した事がありましたらご連絡下さい。」
石橋さんの部屋を後にし、非常口へ向かった…
一階には内側からしか開ける事の出来ないドアがあったがその横の細い路地へでる塀は低く、私も手をついて一度路地へ越えてみた。大人であれば女性でも越える事の出来る高さである事を確認した。
得てして“オートロック、防犯システム完備、防犯カメラ”等と広告をみるがほとんどの場合“入ろう”と思えば他人でも簡単に入る事が出来る。
大体の犯人の足取りがわかった所で山さんと合流する事にした。

山さんは数人の警察官と部屋を回った後であった。事前に石橋さん宅へは自分が行っており不安がっていた事と刺激せずそっとして置いた良いと判断し山さんは石橋宅には寄らない事を伝え聞いていた。
（山さんの優しさが感じとれる）
「犯行はカメラに写る表玄関から入らず非常口から侵入、逃走したと思われます。」
「裏口の路地は人通りがなく不審者の目撃者は難しいと思われます。」
「うむ、大体の現場の把握は出来た。今日は捜査を終了、明日からは忙しくなるから帰って寝ろ、解散！」
「了解！」

僕は敬礼のポーズを取り現場を後にした。
帰宅途中腹が減ったいたので弁当を買い自宅へと向かう。
一人暮らしの僕は家に着くと荷物を降ろした。
部屋の中は出て行く時と同様明るいままだ、昔から暗いのが苦手で部屋の電灯のスイッチは年中入れっぱなしである。
テレビをつけ、弁当を食べる。シャワーを浴びて時計を見ると１２時を回っていたが日課である一日の総纏めを書くのは忘れない、日記みたいな捜査状況みたいな自分でもよくわからないようなノートである。
書き終わったノートを引き出しに入れると時計の針は１時を回っていた。
瞼が重くなり深い眠りにつく。もちろん部屋の明かりは点いたままだ。

3話：捜査初日　1

翌日、署では殺人事件として捜査準備に取り掛かった。
直接の指揮は佐々木部長が取る事になり二人一組の聞き込み調査に３ペアで当たる事になった。僕はもちろん遠山とペアになっている。

今日の捜査として、現場周辺の聞き込み、交遊関係、仕事上の付き合い関係を洗い出す事になった。僕と山さんは１番可能性の高い交遊関係を探る事になり先ず被害者の友達から聞き込みし、男女関係がなかったかどうかを調べる事になる。
佐々木部長がホワイトボードに被害者の写真を貼り、通報があった時刻、僕が昨日取った調書を元にラインと聞き込みをする範囲を書き出していく。

あらかた説明が終わった所で質問がないか聞くが取りあえずは情報をかき集めないと何とも言えないので直ぐに動く事になる。

「山さん…ご家族の方から親友であった白石さんの連絡先を聞いてますのでアポ取りましょうか？」

「あぁ……フーッ」

タバコを燻らせながら窓の外へと煙を吐き出していた。
私は車を左側の路肩に停め電話を取り出した。

「白石さんでしょうか？私西新宿署の北條と申しますが、昨日の天海さんの事件の事で幾つか聞きたい事がありますので、お時間頂けないでしょうか？」

「わかりました。１２時頃に昼休みに入りますのでその時間でよければ大丈夫です。」

落ち着いたような様子で彼女は返答した。多分昨日の時点で連絡が入っていたのであろう。

「ありがとうございます。余り時間を取らせても悪いので時間になったら会社の前迄向かえに来ますので。」

「わかりました、それでは後ほど…」

電話を切った後、山さんに友達の何人かに連絡をして聞き込みをする事にした。手帳には交遊関係から幾つかの身の回りの情報が書き出されていく。

そろそろ時間がきたので白石が勤める会社へと車を走らせる…

「あ…出て来たみたいですね。」

会社の玄関から出て来てキョロキョロしている姿を発見し小走りで駆け寄った。

「白石さんですね、コチラは私の上司で遠山と言います。」

「遠山です。今日はお仕事中突然押しかけて来て申し訳ないですが事件ですのでご協力お願いします。」

「白石です。いえいえ親友の不幸事ですから…私も事件解決の為、少しでもお力になれればと……」

「立ち話も何ですので何処か近くの喫茶店に入りましょうか？」
「はい、わかりました。向かいのちょっと先にお店がありますので、そちらで…」
僕達は白石さんと店へ入った。
…
「カラン、カラン」
店内のドアを開けるとカウベルがなりコーヒーの良い香が漂ってきた。
老舗なのであろう古い時計とアンティークな置物が並んでいて。壁やテーブルがブラウンの木目で良い味を出していた。
「いらっしゃいませ。開いてる席へどうぞ。」
７０過ぎ程の白髪のマスターが丁寧に頭を下げ挨拶をしてきた。
僕たちは角の席へ向かい僕と山さんは壁側に座る。
これは、お約束みたいな物で相手から集中して話を聞きたい時などはこうゆうポジションを取るのだ。相手はコチラしか目を向ける所がなくなり、回りに気をそらさないようにする為である。
女を口説きたい時にも利用出来る。（そんな事はどうでも良いか…）
「白石さん、何か飲みますか？」
「あ…モカで…」
「山さんは、コロンビアで良いですか？」

「あぁ」

「マスター、モカ二つとコロンビア一つ。」

「畏まりました。」

「白石さん、先ず最初に神埼さんに最近何か変わった事とかなかったでしょうか？」

「はい、特には…仕事も充実してたみたいだったし、彼氏の話も最近しましたけど結婚予定の話も出ていた位なので悪くはなかったと思います。」

話の途中でコーヒーが運ばれてきた。

私達はカップに手をつけ話を続ける。

「そうですか…その彼氏の名前と連絡先はわかりますか？」

「はい、名前はタナカ　サトシさん、電話番号はわかりません。あ…ご両親にも紹介してたみたいなのでご両親に聞けばわかるかと思います。」

「後…ちょっと聞きにくいのですが…事件当日、7時頃はどちらへ…」

「これは関係者全員にお聞きする事ですのでお気を悪くなさらずにお願いします。」

「そうですか…家にいました。7時ぐらいは両親と一緒にご飯を食べていた頃です。」

「わかりました。ご協力ありがとうございます。」

山さんはずーっと黙ったままであった…

「山さん…後何かないですか？」

「そうだな…白石さんあんた何か隠してる事があるね？」

「えっ…私の知ってる事は全部話た積もりですが。」

少し動揺しているが山さんはそもそも確信して言っているのだろうか？」

「まぁいい、その内話したい事が出てきたら連絡してくれれば良い。」

白石さんは俯き加減で動揺しているように見えるが僕には山さんの意図が見えないし、白石さんの動揺も何かを隠しているというより重要人物として見られている事に憤りを感じてしまった感じに見えた。

後で山さんに何故そんな事を言ったのか聞いてみよう。

「それでは、お時間取らせました。また何かあったらお聞きしたい事もあるかもわかりませんが今日は此処までで…」

私達は店を後にした。

4話：捜査初日　2

車の中でも山さんは押し黙ったままで外の景色をみながら煙を燻らせていた。

「山さん、どうしたんですか？さっきのも何故あんな事を言ったのか理解出来ません。」

暫く沈黙は続いたがタバコを消すと、その重い口が開いた。

「何か引っ掛かる…」

「第六感ですか？」

山さんは以前の捜査の時も時折こんな事を言って、事件解決の糸口を見つけていた。

「何か重要な事を隠しているって事ですか？それとも犯人である可能性が高いとか？」

……

「彼女は犯人じゃねぇ、彼女はコーヒーカップを右手で持ち上げていた…今の所犯人は左利きの可能性が高い…」

「えっ…鑑識結果も出ていませんよ…」

「ホトケの後ろ首の包丁根は左側から斜めに入った傷だった…右利きの人間が刺そうと思っても一撃で急所を付くのは容易じゃねぇ、つまり犯人は左利きであった可能性が高い…」

凄い洞察力と見解だ、あの血の海の中で鑑識並の犯人像を浮かび上がらせた。

「それじゃ、今の所左利きの関係者は徹底的にマークっスね。」

山さんはまた黙ったままタバコに火を付け押し黙った。

「先程、彼氏だった田中にアポ取ってますんでそっち向かいます。」

会社付近に着くと田中さんが待っていた。
一通りの挨拶を終え話を切り出す。

「すみませんお仕事中に…」

「いえ、営業部なんで会社は抜け出し易いですから…」

「一先ず近くにファミレスがありますのでそちらで…」

私達は田中さんに案内されファミレスに着いた。
コーヒーを注文し話を切りだす。「昨日遺体を見られたと思いますが…交際していた神碕さんに間違いないですね。」

「…はい、どうしてこんな事に……」

目にはじわりと涙を浮かべ口に手を充てていた。

「田中さんお気持ちはお察ししますが、私達も犯人逮捕に全力を上

げておりますので捜査のご協力をお願いします。
「ううっ…はい……わかりました。」
「神碕さんの身の回りに最近変わった事はございませんでしたでしょうか？」
「えぇ…特には、あぁ…でも…」
「田中さんどんな些細な事でも構いません、些細な事から事件の糸口が見えてきたりするのはよくある事ですから。」
田中さんは先程もってきたコーヒーに口を付けると話を切り出した。
「私と真琴が知り合ったのが一年程前なんですが、真琴の前交際相手がしつこくて…半年程前に電話が掛かって来た時に真琴さんから無理矢理取り、迷惑なので今後電話を掛けないよう強い口調で言いました。
その後、着信を拒否にしてたみたいだし、掛かって来る事はなかったと思います。」
「名前はわかりますか？」
「いやぁ、名前までは…白石さんなら知っているかも知れません。」
私はちらりと山さんに顔を向けたが無言のままだったので話を進めた。
「最後にお会いしたのは何時ですか？後、電話を掛けられたのは？」
「三日前です。電話は一昨日の夜に掛けました。」
「後……事件当日、７時頃はどちらに？」

「えっ？…まさか私、疑われているんですか？結婚も予定していた関係なのに…あんまりじゃないですか！」

彼の心中は察するがこちらも手掛かりを捜すのに気を張っている。特にこのような事件では1番疑ってかかるべき人物であり、参考人なのだ。

「田中さん…被害者の関係者は誰であろうとどんな関係であろうとお聞きしています。先程申しましたように些細な事から集めていくのが私達の仕事ですので。」

田中さんは憤りを感じながらも納得した様子で口を開いた…

「…私はその時間は家に帰っておりました…」

「誰か証明出来る人はいますか？」

「一人暮らしなのでいないと思います。」

「わかりました。山さんから何かないですか？」

「田中さん、コーヒーのスプーンを左手で掻き回してたけど左利きかい？」

「えぇ、何でですか？」

「言えね、被害者の刺し傷が左利きの可能性が高かったもんで…」

「ちょっ…ちょっと！山さん…！」

あまりの直球にびっくりした僕は山さんの話を遮ったが田中さんは怒りのあまりまくし立てていた。
「どうゆう事ですか！貴方達は最初から私を犯人と決め付けて私の所に来たんですか！私も被害者なのに酷い！これだから警察は世間から無能呼ばわりされるんですよ！もういい、帰ります！」

田中さんは席を立ちズカズカと店を出て行った。

「あ～、帰っちゃいましたね。どうするんですか、今後もう田中さんから聞けませんよ…」

「鎌かけてみたんだよ…」
そういうと何時ものように山さんは押し黙った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7702h/

ＢＡＤ ＥＮＤ…

2010年10月8日14時23分発行